医療タイムス

週刊医療界レポート

2015.11/9 No.2230

特集 未病サミット神奈川2015 in 箱根

未病と社会システム

新しいヘルスケアシステムの構築を目指す

タイムスインタビュー

「社会復帰する」との熱き思いに応える
新しい総合リハビリサービスを提供

株式会社ワイズ
代表取締役会長兼CEO
早見泰弘氏

タイムスレポート

患者のための薬局ビジョン
「門前」から「かかりつけ」、そして「地域」へ

Top News

調剤報酬の抜本見直しを　財務省
B型肝炎ワクチン、6%が助成　厚労省調査

「社会復帰する」との熱き思いに応える新しい総合リハビリサービスを提供

早見泰弘氏

株式会社ワイズ
代表取締役会長兼ＣＥＯ

「パソコンを打ちたい」「歩けるようになりたい」―デイサービスの運営を通じてそんな声に多く接した株式会社ワイズの早見泰弘会長は、脳梗塞リハビリセンターを開設した。脳血管疾患の後遺症に悩む利用者のＱＯＬ向上を徹底的に目指すセンターには、日本はおろか海外からも来店する。今後のリハビリの在り方に一石を投じそうな勢いだ。

取材●田川丈二郎

脳梗塞後遺症で悩んでいる方の選択肢の1つでありたい

――早見会長は、他分野からまずは介護業界に参入してきました。

「私自身はこれまで20年間近くＩＴ関連のビジネスに携わってきたのですが、２年前に腰椎のヘルニアを患い、それが手術するまでに悪化してしまいました。手術自体は成功したのですが、筋力が落ちて私自身がリハビリを行うようになったのです。そこで経験したのは、ただ寝ているだけでは気持ちも沈みがちですが、リハビリで少しでも歩けるようになると、元気が出て明るくなるということでした。

今後はこのような社会に貢献できる仕事をしたいと考え、以前から旧知の仲であった伊藤康祐社長と、株式会社ワイズを立ち上げ、リハビリ＆フィットネス型デイサービス『アルクル』の展開をはじめました。デイサービス施設は現在では、都内各所に６施設展開しています」

――そこから脳梗塞リハビリセンターの展開を始めました。

「実際にデイサービスを展開していく中で、リハビリの実態というものを目の当たりにしました。つまり現状では180日を上限にして病院を退院することとなっていて、それからもリハビリを必要とされる方は、デイサービスやデイケア、訪問リハビリなどの介護保険の枠組みで続行することとなります。特にデイサービスでは認知症の方を含め、さまざまな方が同時に行うグループリハビリが中心となっているため、個人の症状に合わせたリハビリ環境が整っているとはいえません」

――現実として、カスタマイズされたリハビリ環境が必要だと。

「例えば脳梗塞を中心とした脳血管疾患患者は現在、150万人にいるといわれ、2025年には高齢者の激増や、糖尿病、高脂血症などの生活習慣病の増加により、300万人を超すことが予想されています。さらに脳血管疾患患者のうち病院を退院後しても35%の人が、まひなどの障害が残りリハビリが必要とされているのです。

後遺症を抱えた方の中には、まひ状態の中で暮らしていくための生活支援に加えて、自分の足で歩きたい、パソコンを打てるようになって社会に復帰したいと考え機能回復のためのリハビリを願う方も多くいます。その機能回復のために、私たちがお役立てることはないかと考えたときに、脳梗塞リハビリセンターを設立したわけです」

――リハビリの内容は。

「まず人間の本来の自然治癒力を引き出す鍼灸施術を取り入れました。この鍼灸は、ＷＨＯ（世界保健機関）でも脳卒中の後遺症に対する効果が認められている治療法です。

その後、まひにより動かなくなった部位を、理学療法士や作業療法士による専門的なアプローチで施術を行います。ここでは、手技や道具による刺激を通して身体が動くという事実を脳に伝えることで、手足の動かし方を脳が思い出し、反復することで運動の仕方を学習していきます。また言語障害を抱える方には言語聴覚士による施術メニューも用意しています。

続いて、トレーニングルームでレッドコードを用いた歩行訓練や症状に応じたトレーニングも、４種類のマシンを使って実施していきます。この鍼灸からはじまる一連の流れは『リハセン式活脳プログラム』としてパッケージ化されていますが、いずれも利用者１人ひとりの症状や状態にあわせ、カスタマイズされたリハビリを行うことが大きな特徴となっています。自費の治療となりますので、料金は約２時間のメニューで１万5000円です。

利用者や家族が改善を実感し、状況を把握できるよう、ビフォーアフターを動画や写真なども交えながら可視化できる評価シートも作成して、モチベーションの維持につなげています」

――反応はどうでしょうか。

「2014年９月にリハビリセンターを初めて開設して以来、現在までに東京都内に５施設を展開しています。利用者数・実績数とも右肩上がりで上昇し、月平均利用回数は2.8回となっています。

利用者は東京近郊からの利用がもちろん多いのですが、北関東や東北など日本の各地から、また最近ではドイツや中国からも利用していただくケースがありました。多くはインターネットを見て、私どもの存在を知ったのですが、検索のキーワードは『リハビリ　パソコンを打てる』と具体的なものが多いようです。年代を見ても、働き盛りである50歳代、40歳代が半数以上となり、社会復帰、機能回復を目指す私たちのリハビリが待ち望まれ、理解されていることを実感しています」

――当然、病院や介護施設との連携も必要ですね。

「利用者のアンケートを通じて分かったことは、最近では退院後のリハビリ施設として病院からの紹介や、介護のケアマネジャーからの紹介で来られた人が増加してきています。

現在は時代の流れとしてリハビリに光があたってきており、単に最低限の生活維持だけではなくＱＯＬ向上を目指したリハビリを望むニーズは絶対あると思いますし、脳梗塞の後遺症で悩んでいる方の選択肢の１つとして私たちは存在していきます」

――課題と展望を。

「介護施設運営会社がリハビリセンターを展開するということに、業界内でとまどいがあることも私たち自身も感じています。

ただ先ほど来申し上げている通りに、機能回復、ＱＯＬ向上のためのリハビリは絶対に必要ですし、実際にパソコンのキーボードが打てるようになり社会復帰が実現したという成果も生まれています。

また医療未経験であるがゆえの発想もあります。リハビリセンターに脳梗塞と冠したのも、脳血管疾患の４分の３が脳梗塞によるものということで、ネットでの検索をしやすくするためなのです。

今後ともさまざまに目を配りながら、全国にいる利用者のためにも、１つでも多くリハビリセンターを展開したいと思います」

Profile

◆はやみ・やすひろ氏（43歳）

1972年東京神田生まれ。96年法政大学経済学部卒業。96年7月Webマーケティング会社株式会社イニットを設立し、代表取締役社長に就任。Web製作業界で当時ＴＯＰ３規模の会社へ拡大させる。その後もＩＴ関連企業で活躍。2014年自らのリハビリ体験を通じて、今後の社会での必要性を感じて株式会社ワイズを設立。現在は介護保険リハビリデイサービス、脳梗塞リハビリセンターなど18施設を直営で運営する。

早見会長（右２人目）と伊藤康祐社長（右端）と脳梗塞リハビリセンター新宿のスタッフたち

ゴルフ　前職では法人営業役員として、年間70～80回のラウンドを全国のゴルフ場で回っていた。腕前もシングル級。ただし、「最近ではラウンドする機会はめっきり減りました」
（写真はトム・ワトソン選手と宮崎のトムワトソンコースにてラウンド時）